

日本短篇文学全集

8

篇文学全集
8

亭四迷

外

露伴

敦



責任編集
臼井吉見

筑摩書房

日本短篇文学全集 第8巻

昭和43年8月5日第一刷発行

二葉亭四迷

著者 森 鷗 外
幸 田 露 伴
中 島 敦

発行者 竹之内 静雄

発行所 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8

郵便番号 101—91

電話 東京(291)7651

振替 東京4123

製版・明和印刷

印刷・多田印刷

製本・鈴木製本

定価 360円

目次

二葉亭四迷

あいびき	三
めぐりあい	五

森 鷗外

舞 姫	七
花 子	九
追 儼	六
普 請 中	三
護持院ヶ原の敵討	一〇

最後の一句……………一三

じいさんばあさん……………一四

幸田露伴

夜の雪……………一五

二日物語……………一七

幻談……………一八

中島 敦

山月記……………二三

悟浄出世……………二三

名人伝……………二六

鑑賞(吉田精一).....二五

装幀 枡折久美子

二葉亭四迷

二葉亭四迷(一八四一—一九〇〇)

文久二年江戸・市ヶ谷合羽坂の尾州藩邸で生まれた。本名長谷川辰之助。明治十四年東京外語学校露語部に入學した。はじめ「東洋豪傑」にあこがれ、ロシアの勢力を防ぐために入學したが、在学中、ロシア文学の魅力にふれ、その芸術家氣質を開花させた。この間、ロシア文学の代表的作品はほとんど読破し、さらにペリンスキーの評論などを読み進んだ。明治十八年、学制改革で、外語学校が廃止され、それを不満とし、十九年退學した。同時に坪内逍遙と知り合った。明治十九年「中央學術雜誌」に『小説総論』を発表、そのかわり小説『浮雲』に着手し、二十年『浮雲』を単行本として刊行。二十一年、『浮雲』第二編、ツルゲーネフの短篇『あいびき』二十二年同じく中編『めぐりあい』を発表、新文学を代表する作家と数えられた。明治二十二年『浮雲』第三編を発表したまま作家としての活動を中断し、内閣官報局の雇員となった。以後七年の間に、多方面の書物を読み、結婚し、家庭をもち、離婚をした。明治二十九年、ツルゲーネフの『アーシャ』を訳し、『片恋』と題して発表。翌三十年ゴーゴリの『肖像画』ツルゲーネフの『浮草』などを訳した。明治三十二年東京外語学校教授、三十五年辭し、大陸にわたる。三十六年帰国。以後、三十九年まで、朝日新聞の記者として過ごす。三十九年小説『其面影』四十年『平凡』を発表し、好評を得た。明治四十一年朝日新聞特派員としてロシアに行った。その地で神經衰弱から肺結核にかかり、四十二年海路帰国の途に付いたが、五月十日ベルガル灣上で死去した。年四十六歳。「二葉亭四迷全集」全九巻 昭和三十九年 岩波書店刊。

あいびき

このあいびきは先年仏蘭西で死去した、露国では有名な小説家、ツルゲーネフという人の端物の作です。今度徳富先生の御依頼で訳して見ました。私の訳文は我ながら不思議とソノ何んだが、是れでも原文は極めて面白いです。

秋九月中旬というころ、一日自分がさる樺の林の中に座していたことが有った。今朝から小雨が降りそそぎ、その晴れ間にはおり／＼生ま燦かな日かげも射して、まことに気まぐれな空合い。あわ／＼しい白ら雲が空一面に棚引くかと思うと、フトまたあちこち瞬く間雲切れがして、無理に押し分けたような雲間から澄みて伶俐し気に見える人の眼の如くに

朗かに晴れた蒼空がのぞかれた。自分は座して、四顧して、そして耳を傾けていた。木の葉が頭上で幽かに戦いだ、その音を聞いたばかりでも季節は知られた。それは春先する、面白そうな、笑うようなさぐめきでもなく、夏のゆるやかなそよぎでもなく、永たらしい話し声でもなく、また末の秋のおど／＼した、うそさぶそうなお饒舌りでもなかつたが、ただ漸く聞取れるか聞取れぬ程のしめやかな私語の聲で有った。そよ吹く風は忍ぶように木末を伝った。

照ると曇るとで、雨にじめつく林の中のようにすが間断なく移り変った。或はそこに在りとある物総て一時に微笑したように、隈なくあかみわたって、さのみ繁くもない樺のほそ／＼とした幹は思いがけずも白絹めく、やさしい光沢を帯び、地上に散りしいた細かな、落ち葉は俄かに日に映じてまばゆきまでに金色を放ち、頭をかきむしったような「パアポロトニク」(蕨の)のみごとな茎、しかも熟え過ぎた葡萄

めく色を帯びたのが、際限もなくもつれつからみつして、目前に透かして見られた。

或はまたあたり一面俄かに薄暗くなりだして、瞬く間に物のあいりも見えなくなり、樺の木立ちも、降り積ったままでまだ日の眼に逢わぬ雪のように、白くおぼろに霞む——と小雨が忍びやかに、怪し気に、私語するようにパラ／＼と降って通った。樺の木葉は著しく光沢は褪めていてもさすがになお青かった、がただそちこちに立つ稚木のみは総て赤くも黄ろくも色づいて、おり／＼日の光がいま雨に濡れた計りの細枝の繁味を漏れて滑りながらに脱けて来るのをあびては、キラ／＼ときらめいていた。鳥は一ト声も音を聞かせず、皆どこにか隠れて窺ましかえっていたが、ただ折節に人をさみした白頭翁の声のみが、故鈴でも鳴らす如くに、響きわたった。

この樺の林へ来るまえに、自分は獵犬を曳いて、さる高く茂った白楊の林を過ぎたが、この樹は——白

楊は——全体虫がすかぬ。幹といえば、蒼味が、つた連翹色で、葉といえば、鼠とも附かず緑とも附かず、下手な鉄物細工を見るようで、しかも長いッぱいに頸を引き伸して、大団扇のように空中に立ちただかつて——どうも虫が好かぬ。長たらしい茎へ無器用にヒッ付けたような薄きたない円葉をうるさく振り立て、——どうも虫が好かぬ。この樹の見て快よい時と云っては、ただ背びくな灌木の中央に一段高く聳えて、入り日をまともに受け、根本より木末に至るまでむらなく樺色に染まりながら、風に戦いでいる夏の夕暮か、——さなくば空名残りなく晴れ渡って風のすさまじく吹く日、あおそらを影にして立ちながら、ザワ／＼ざわつき、風に吹きなやまされる木の葉の今にも梢をもぎ離れて遠く吹き飛ばされそうに見える時かで。とに角自分は此樹を好まぬので、ソコデその白楊の林には憩わず、わざわざこの樺の林にまで辿り着いて、地上わずか離れて下枝

の生えた、雨凌ぎになりそうな木立を見立て、さ
てその下に栖すまを構え、四辺の風景を眺めながら、た
だ遊獵者のみが覚えの有るという、例の穏かな、罪
のない夢を結んだ。

何ン時ばかり眠ッていたか、ハッキリしないが、
とに角暫らくして眼を覚まして見ると、林の中は日
の光りが到らぬ隈もなく、うれしそうに騒ぐ木の葉
を漏れて、はなやかに晴れた蒼空あおぞらがまるで火花でも
散らしたように、鮮かに見渡された。雲は狂い廻わ
る風に吹き払われて形を潜め、空には纖雲ちりくも一ツだも
留めず、大氣中に含まれた一種清涼の気は人の気を
爽かにして、穏かな晴夜の来る前触れをするかと思
われた。自分は将まさに起ち上りてまたさらに運だめし
(但し銑頭の事で)をしようとして、フト端然と坐している人
の姿を認めた。眸子ひとみを定めてよく見れば、それは農
夫の娘らしい少女であつた。二十歩ばかりあなたに、
物思わし氣に頭を垂れ、力なさそうに両の手を膝に

落して、端然と坐していた。旁々かたがたの手を見れば、半
ばむき出しで、その上に載せた草花の束ねが呼吸を
するたびに縞のペチコートの上をしずかにころがッ
ていた。清らかな白の表衣をしとやかに着做して、
咽喉元のどもとと手頸のあたりでボタンをかけ、大粒な黄ろ
い飾り玉を二列に分ッて襟から胸へ垂らしていた。
この少女なかくの美人で、象牙をも欺むく色白の
額際で幅の狭い緋の抹額を締めていたが、その下か
ら美しい鶉色で、しかも白く光る濃い頭髪を叮嚀ように
梳かしたのがこぼれ出て、二ツの半円を描いて、左右
に別れていた。顔の他の部分は日に焼けてはいたが、
薄皮だけに却て見所が有った。眼ざしは分らなかッ
た、——始終下目のみ使ッていたからで、シカシそ
の代り秀でた細眉と長い睫毛まつげとは明かに見られた。
睫毛はうるんでいて、旁々かたがたの頬にもまた蒼ざめた唇
へかけて、涙の伝ッた痕が夕日にはえて、アリ／＼
と見えた。総じて首付が愛らしく、鼻がすこし大き

く円すぎたが、それすらさのみ眼障りにはならなかつた程で。取分け自分の氣に入つたはその面ざし、まことに柔和でしとやかで、取締ろつた氣色は微塵もなく、さも憂わしそうで、そしてまた愛度氣なく途方に暮れた趣きも有つた。たれをか待合わせているのと見えて、何か幽かに物音がしたかと思うと、少女はあわてゝ頭を拾^かげて、振り反つて見て、その大方の涼しい眼、牝鹿のものゝようにおど／＼したのをば、薄暗い木蔭でひからせた。カツと見ひらいた眼を物音のした方へ向けて、シケ／＼視詰めたまゝ、暫らく聞きすましていたが、さて溜息を吐いて、靜にこなたを振り向いて、前よりは一きわ低く屈みながら、また徐ろに花を折り分け初めた。擦りあかめたまぶちに、厳しく拘攣する唇、またしても濃い睫毛の下よりこぼれ出る涙の雫は流れよどみて日にきらめいた。こうして暫く時刻を移していたが、その間少女は、かわいそうに、みじろぎをもせず、

ただ折々手で涙を拭いながら、聞き澄ましてのみいた、ひたすら聞き澄ましてのみいた……フとまたガサガサと物音がした、——少女はブル／＼と震えた。物音は罷^やまぬのみか、次第に高まつて、近づいて、遂に思い切つた濶歩の音になると——少女は起き直つた。何となく心おくれのした氣色。ヒタと視詰めた眼ざしにおど／＼した所も有つた、心の焦られて堪えかねた氣味も見えた。しげみを漏れて男の姿がチラリ。少女はそなたを注視して、俄にハツと顔を赧^からめて、我も仕合とおもひ顔にニッコリ笑つて、起ち上ろうとして、フトまた萎れて、蒼ざめて、どきまぎして、——先の男が傍に来て立ち留つてから漸くおず／＼頭を拾^かげて、念ずるように其の顔を視詰めた。

自分はなお物蔭に潜みながら、怪しと思う心にほだされて、その男の顔をツク／＼眺めたが、あからさまに言えば、余り氣には入らなかつた。

これはどう見ても弱冠の素封家の、あまやかされすぎた、給事らしい男で有った。衣服を見ればことさらに風流をめかしているうちにも、またどこことなく止度しど気げないのを飾る気味も有って、主人の着ふるしめく、茶の短い外套をはおり、はし／＼を連翹色に染めた、薔薇色の頸巻をまいて、金モールの抹額を付けた黒帽を眉深にかぶっていた。白襷シヤツの角のない襟は用捨もなく押し付けるように耳朶みみを撐ささえて、また両頬を擦り、糊で固めた腕飾りは全く手頸てのねをかくして、赤い先の曲った指、Turquoise 寶石の一種の製の Myosotis 名神を飾りに付けた金銀の指環を幾個ともなくはめていた指にまで至った。世には一種の面貌が有る、自分の観察した所では、常に男子の気にもとる代り、不幸にも女子の気に適う面貌が有るが、此男のかおつきは全くその一ツで、桃色で、清らかで、そして極めて傲慢おごりそうである。己があらけない貌だちにわざと人を軽ろしめ世に倦みはてた色を装おう

としていたものと見えて、絶えずたださえ少いさな、薄白く、鼠ばみた眼を細めたり、眉をしわめたり、口角を引き下げたり、しいて欠伸あくびをしたり、さも気のなさそうな、やりばなしな風を装うて、或は勇ましく捲き上ったもみあげを撫でゝ見たり、または厚い上唇の上の黄ばみた髭を引張て見たりして——やどうも見て居られぬ程に様子を売る男で有った。待合せていた例の少女の姿を見た時から、モウ様子を売り出して、ノソリ／＼と大腿にあるいて傍へ寄りて、立ち止って、肩をゆすって、両手を外套のかくしへ押し入れて、気の無さそうな眼を走らしてジロリと少女の顔を見流して、そして下に居た。

「待ったか？」ト初めて口をきいた。なおどこをかも眺めた儘で、欠伸をしながら、足を揺かしながら「ウー？」

少女は急に返答をしえなかつた。

「どんなに待ったでしょう」ト遂にかすかにいった。

「フム」ト云ツて、先の男は帽子を脱した。さももつたいらしく殆ど眉際まゆぎわよりはえだした濃い縮れ髪を撫で、鷹揚あたらに四顧して、さてまたソツと帽子をかぶツて、大切な頭をかくして仕舞ツた。「あぶなく忘れる所よ。それにこの雨だもの！」トまた欠伸。「用は多し、そうくは仕切れるもんじやない、その癡動ややともすれば小言だ。トキニ出立あしたは明日になツた……」

「あした！」ト少女はビックリして男の顔を視詰めた。

「あした……オイく頼むぜ」ト男は忌々しそうに口早に云ツた、少女のブルく震えて差うつむいたのを見て。「頼むぜ『アクーリナ』泣かれちやアあやまる。おれはそれが大嫌いだ」。ト低い鼻に皺を寄せて、「泣くならおれはすぐ帰ろう……何だ馬鹿氣た——泣く！」

「アラ泣きはしませんよ、トあわてゝ「アクーリ

ナ」は云ツた。せぐり来る涙を漸くの事で呑み込みながら。暫らくして、「それじや明日あしたお立ちなさるの。いつまた逢われるだろうネー」

「逢われるよ、心配せんでも。さよう、来年——でなければさらいねんだ。旦那は彼得堡ペテルブルクで役にでも就きたいようすだ、トすこし鼻声で気のなさそうに云ツて「ガ事に寄ると外国へ往くかも知れん」。

「もしそうでもなツたらモウわたしの事なんざア忘れてお仕舞いなさるだろうネー」、ト云ツたが、いかにも心細そうで有ツた。

「何故？ 大丈夫！ 忘れはしない、ガ『アクーリナ』ちツとこれからは氣を附けるがいゝぜ、わるあがきもいゝ加減にして、おやじの云う事もちツとは聴くがいゝ。おれは大丈夫だ、忘れる氣遣いはない——それはなア……イ」、ト平気で伸をしながら、また欠伸をした。

「ほんとに、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、

忘れちゃアいやですよ」。ト少女は祈るが如くに云った、「こんなにお前さんの事を思うのも、慾徳なくじゃないから……おとツさんのいうこと聴けとおいいなさるけれど……わたしにはそんな事ことアできないワ……」

「何故？」ト仰あおむ向けざまにねころぶ拍子に、両手を頭に敷きながら、宛も胸から押し出したような声で尋ねた。

「なぜといッてお前さん——アノ始末だものヨ……」

少女は口をつぐんだ。「ヴィクトル」は袂時計の鎖をいらいだした。

「オイ、『アクーリナ』、おまえだッて馬鹿じや有るまい」トまた話し出した、「そんなくだらん事をいうのは置いて貰おうぜ。おれはお前の為を思ッていうのだ、わかつたか？」もちろんお前は馬鹿じやない、ヤッぱりお袋の性しやうを受けてると見えて、それこ

そ徹頭徹尾いまのソノ農婦というでもないが、シカシともかくも教育はないの——そんなら人のいうことならハイと云ッて聞いているがいゝじやないか？」

「だッてこわいようだもの」。

「ツ、こわい。何もこわいことはちツともないじやないか？ 何だそれは」と「アクーリナ」の傍へすりよッて「花か？」

「花ですよ」ト云ツたが、いかにも哀れそうで有った。

「この清涼茶は今あたしが摘んで来たの」トすこし気の乗ツたようす「これを牛の子にたべさせると薬になるツて。ホラ *Bur-marigole*——そばツかすの薬。チョイと御覧なさいよ、うつくしいじや有りませんか、あたし産れてからまだこんなうつくしい花ア見たことないのよ。ホラ *myosotis*、ホラ堇……ア、これはネ、お前さんにあげようと思ッて摘んで来たのですよ」ト云いながら、黄ろな野艸のぐさの花

の下にあった、青々とした Blue-bottle の、細い草で束ねたのを取り出して「入りませんか？」

「ヴィクトル」はしぶく手を出して、花束を取って、気の無さそうに匂いを嗅いで、そして勿体をつけて物思わしように空を視あげながら、その花束を指頭でまわしはじめた。「アクーリナ」は「ヴィクトル」の顔をジッと視詰めた……その愁然として眼付のうちになさけを含め、やさしい誠心まじこころを込め、吾仏とおおき敬う気さしを現わしていた。男の氣をかねていれば、敢て泣顔は見せなかったが、その代り名残り惜しうにひたすらその顔をのみ眺めていた。それに「ヴィクトル」といえば史丹の如くに臥そべつて、グッと大負けに負けて、人柄を崩して、いやながら暫く「アクーリナ」の本尊になつて、その礼拝祈念を受けつかわしておつた。その顔を、あから顔を見れば、ことさらに作つた僂蹇えんけん恣睢しき、無頓着な色を帯びていたうちにも、どこともなく得々とした

所が見透かされて、憎かつた。そして顧みて「アクーリナ」を視れば、魂が止め度なく身をうかれ出で、男の方へのみ引かされて、甘えきつてゐるようであゝよかつた！ 暫くして「ヴィクトル」は……「ヴィクトル」は花束を艸の上に取落して仕舞い、青銅の框わくを嵌めた眼鏡を外套の隠袋かくしから取り出して、眼へ宛がおうとしてみた、がいくら眉を皺め、頬を捻じ上げ、鼻まで仰向かせて眼鏡を支えようとして見ても、——どうしても外れて手の中へのみ落ちた。

「なにそれは？」と「アクーリナ」がケバンな顔をして尋ねた。

「眼鏡」と「ヴィクトル」は傲然として答えた。

「それをかけるとどうかなるの？」

「よく見えるのよ」。

「チョイと拝見な」。

「ヴィクトル」は顔をしかめたが、それでも眼鏡は渡した。

「こわしちやいけんぜ」。

「大丈夫ですよ」トこわく眼鏡を眼のそばへ持つて来て「オヤ何にも見えないよ」ト愛度あどや気なくいつた。

「そ、そんな……眼を細くしなくっちゃいけない、眼を」トさながら不機嫌な教師のような声で叱った。「アクーリナ」は眼鏡を宛てがっていた方の眼を細めた。「チョッ、まぬけめ、そっちの眼じゃない、こっちの眼だ」トまた大声に叱って、仕替える間もあらせず、「アクーリナ」の持つていた眼鏡をひつたくつてしまった。

「アクーリナ」は顔を赤くして、氣まりわるそうに笑つて、余所よそをむいて、

「どうでも私たちの持つもんじやないと見える」。

「知れた事サ」。

かわいそうに、「アクーリナ」は太い溜息をして黙してしまつた。

「ア、『ヴィクトル、アレクサンドルイチ』、どうかして、一所に居られるようには成らないもんかねー」トだしぬけに云つた。

「ヴィクトル」は衣服の裾で眼鏡を拭い、再び隠袋に納めて、

「それやア当坐四五日はちつとは淋しかろうサ」ト寛大の処置を以て、手ずから「アクーリナ」の肩を軽く叩いた。「アクーリナ」はその手をソツト肩から外して、おずく接吻した。「ちつとは淋しかろうサ」トまた繰返して云つて、得々と微笑して、「だが已やむを得ざる次第じゃないか？ マア積つても見るがいく、旦那もそうだが、おれにしてもこんなケチな所にやいられない、けだしモウじきに冬だが、田舎の冬というやつは忍ぶ可らずだ、それから思うと彼得堡ペテグルク、たいしたものだ！ うそとおもうなら往つて見るがいく、お前たちが夢に見た事もない結構なものばかりだ。こゝ立派な建家、町、カイ社、文